

「サー、今度はザビーの護神棒をバタフライの肉壺で愛してクダサーイ！」

「……ひいっ!？」

下を見下ろした濃姫の目にザビーの男棒が視界に入った。
それは常人よりも一回りもある大きさと濃姫の腕よりも太いかも知れない。

先端からは先走りの液体がよだれの様に流れ
赤黒くびくりと脈打ち獲物を待っているかのようだった。

「い、いやあっ!!そんなの入らないわ!!」

逃げようと必死に身をよじるがザビーの腕にがっちりと捕まり無駄な抵抗に終わる。

「大丈夫大丈夫、愛があれば痛くナイ痛くナイ」

「愛なんて最初から無い！」

「嫌よ嫌よも好きのウチー！昨日の人妻は今日の肉壺ライフデース！」

うなじにザビーの荒々しい息遣いを感じ濃姫は鳥羽だった。
ザビーはゆっくりと濃姫の秘列に男棒をびたりとあてがった。
びくびくと男棒が脈打つ感触を濃姫は膣口から感じ青ざめる。
男棒の先端がぐっと圧迫するように押して来た。

「いやあっ！お願い！やめてえっ！」

挿入される恐怖に濃姫は必死に逃げようとするが
抵抗虚しく男棒が更に力を込めて入りこもうとする。

「ザビーと一緒に天国逝きまショー！」

「ゴートゥー・ザ・ザビー！」

ずぶり、と音を立てるように先端が濃姫の膣口に沈んだ。

「いやあああっ！」

濃姫は先端が入り込む感触の悍まじさに溜まらず悲鳴を上げた。

「いやあああっ！駄目、抜いて、抜いてえっ！」

「まだまだ先っちょダケしか入ってないネー。

このまま全部入れちゃいまショーカー？そうしまショー！」

ザビーは嫌がる濃姫の身体をゆっくり下ろすと
先端のみ入り込んだ男棒がゆっくりと飲み込まれようとしていた。
極太の男棒が狭い膣口を押し広げながら侵入を開始した。